

ローマ帝国属州パンノニアの都市 Aquincum（現ブダペスト）近郊から見つかった 4 世紀後半のある墓碑には、ラテン語で “Francus ego civis Romanus miles in armis”（Corpus Inscriptionum Latinarum, III, Berlin, 1876, no. 3576）と刻まれている。この碑文を取りあげた研究は大量に存在するのだが、解釈は主として二つに分かれているようである。「私はフランクの市民であり、武器を取るときはローマの兵士である」、もしくは「私はフランク人であり、ローマ市民であり、武装した兵士である」。どちらの読みをとるにしても、ゲルマン人の一派であるフランク人は、同時にローマ人もしくはローマ市民であり、兵士という地位とともにそのことを碑文として残そうとした事実注目したい。この人物は、フランク人であると同時にローマ人であると自負していたのである。フランク人の一部は 358 年以來ローマ帝国内部に居住を認められ、その後ローマ帝国軍に有能な兵士を供給していたことが知られる。彼らは自分たちのことをどのように捉えていたのだろうか。この碑文が仄めかすように、フランク人であるとともにローマ帝国の一員であるという意識が主流となっていたのであろうか。兵士であることは、フランク人としてのアイデンティティと結びついていたのか、あるいはむしろローマ人としてのそれを強く意識させたのか。我々は、ローマ人とゲルマン人とを分けて考えがちである。しかし、その当時を生きていた人々の自己認識は我々が考える以上に複雑で複合的であった。

加納修 教授



フランク人が用いたフランクスカ（francisca）と呼ばれる戦斧（Altera levatur – 投稿者自身による著作物，CC 表示-継承 4.0，<https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=104514250> による）

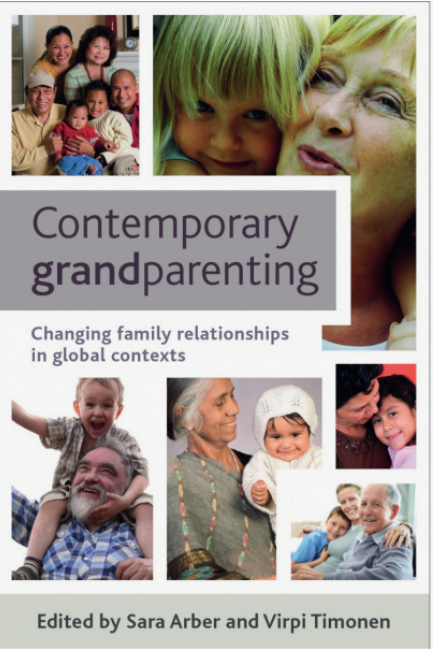
みなさんは社会学と聞いて、どのようなイメージを持つか。身近に感じつつも、実際に何を研究するのか掴みにくいかもしれません。社会学は、人びとの関係性や社会制度のあり方を明らかにする学問です。身近な現象を「当然」として受け流すのではなく、そこに潜む仕組みを問い直すことが社会学の醍醐味です。

私は祖父母に育てられた経験から、高齢者福祉や世代間関係に強い関心を持ち、祖父母の孫育てに関する研究を進めています。最初に驚いたのは、世界各地の祖父母による孫の世話の実態が、私の当初の印象とは大きく異なることでした。福祉が充実しているヨーロッパでは祖父母の育児参加が少ないと予想していましたが、実際には地域差が顕著で、北欧・中欧と比べて南欧では祖父母による育児が一般的です。個人主義を重視するアメリカでも、人種や社会階層によって祖父母の育児参加度は大きく異なります。私たちの住むアジアでは、日本と中国を比較すると興味深い対比が見えてきました。日本では祖父母の支援は限定的である一方、中国では当然の慣習となっています。多くの人はこの違いを文化的伝統の影響だと考えがちですが、私が歴史的文献分析とインタビュー調査を行なった結果、意外な発見がありました。両国とも祖父母育児の実践は世代によって大きく変化しており、文化的伝統の影響による一貫性は見られませんでした。むしろ、労働市場の変化や保育政策の違いが決定的な役割を果たしていることが明らかになったのです。

社会を学ぶことは、自分自身と社会のつながりを見つめ直すことでもあります。みなさんも、自らの経験や疑問を大切にしながら、社会学の扉を叩いてみませんか。

聶穎 博士後期課程 3 年

『Contemporary Grandparenting』（Sara Arber & Virpi Timonen 編）の表紙。世界各地における祖父母と孫の関係を描いている。



7 月に授業の一環として群馬県でフィールドワークを行いました。そこは古代には「上野国」と呼ばれていた地域で、石碑や古墳といった遺跡が数多く残されています。フィールドワークに行く前には、上野国の歴史について文献を調べたり、発掘調査の成果を読んだりして学びを深めました。その上で現地では「上野三碑」とされる三つの石碑や総社古墳群を訪れ、かつての上野国府、多胡郡家が存在した土地を歩きました。事前学習を経て現地に足を運ぶことで、単に知識として得たものを現場で実感に変えることができました。

地図を片手に土地を歩いていると、整備された道路や建物の中に歴史を感じることができます。もちろん、石碑や古墳などの遺跡を目にすることも、文献史料からはわからない実物からの学びにつながります。しかしそれだけではありません。例えば、かつて多胡郡家の正倉が置かれた場所。そこはすぐ北に川が通っており、水運として利用されていたことがうかがえます。遺跡が存在する場所とその地域の地形とを照らし合わせることによって、古代の人々の生活や物流の姿がより具体的に思い描けるのです。古代の人々がなぜその土地に住み、施設を作ったのか。こうした疑問は文献や論文を読めば知識として得ることはできるでしょう。しかし実際に現地を歩くことでそれらの知識と目の前の風景とが結びつき、実感として理解することができるようのです。

机の上で本と向き合っているだけでは気付けない、古代と現代とのつながり。フィールドワークに行くことでそれを肌で感じることができます。このように現地を歩き、土地の歴史と向き合うことも日本史学の一環です。皆さんもぜひ地図を片手に土地を歩いてみてください。普段は何気なく歩いている場所も、日本史の知識を重ねてみることでまた違って見えてくるはずです。

佐竹璃歩 博士前期課程 1 年

群馬県にて 上野国分尼寺趾



月刊
名大文学部
第 147 号

隔月刊行



編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2025 年 9 月 10 日発行